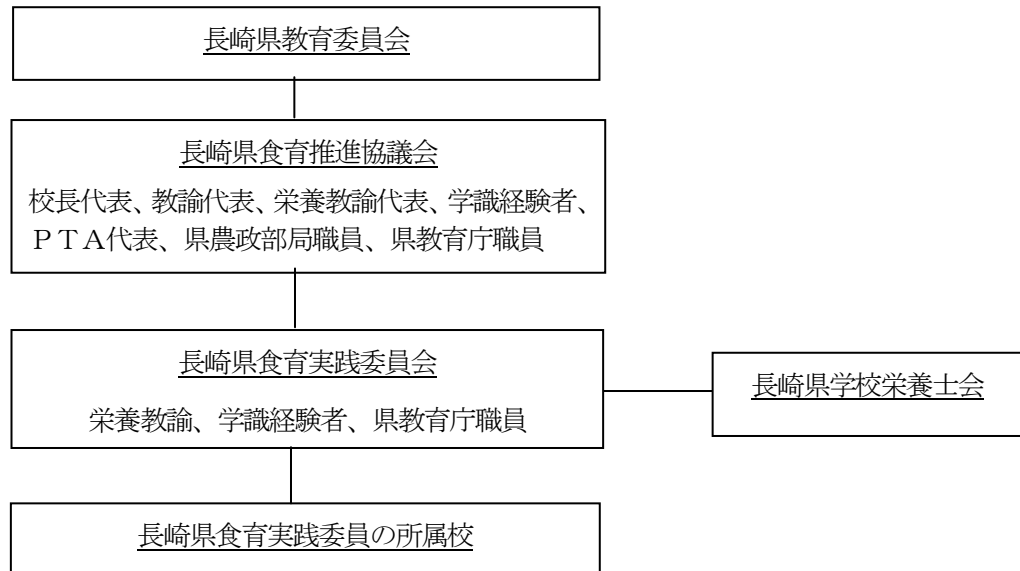


栄養教諭を中核とした食育推進事業 事業結果報告書

都道府県名	長崎県
推進地域名	全域

1. 事業推進の体制



2. 具体的取組等について

テーマ1	各教科等における食に関する指導を充実させるための方策
1	研究推進のための協議会等の開催 ①長崎県食育推進協議会（2回） <ul style="list-style-type: none">・事業における研究推進の在り方について検討及び検証 ②長崎県食育実践委員会（4回） <ul style="list-style-type: none">・児童生徒の食生活等実態調査に係る調査項目の検討及び結果考察・各自の学校における研究の方向性について検討・各自の学校における実践研究についての情報交換・研究成果のとりまとめ
2	実態把握のため、児童生徒の食生活等実態調査の実施 ①調査の概要 <ul style="list-style-type: none">○対象：県内の公立小学校5年生、公立中学校2年生の1学級 (小学校 7, 716人、中学校 4, 969人、計 12, 685人)○調査方法：各学校において、アンケート用紙に無記名自記式により回答。集計は、「長崎県学校栄養士会」の協力を得て実施し、集計データの分析・結果のまとめは「長崎県食育実践委員会」において行う。 ②調査に係るスケジュール <ul style="list-style-type: none">8月 調査項目等の検討（第1回長崎県食育実践委員会）9月 調査の実施9月～ 調査の集計（長崎県学校栄養士会）11月 調査結果のとりまとめ（第3回長崎県食育実践委員会）

- 1月 「平成22年度児童生徒の食生活等実態調査結果報告書」及び「概要版」の作成
2月 調査結果の公表（ホームページ等）

3 食育実践委員の学校における実践研究の取組

①実践研究に係るスケジュール

- 8月 各委員の学校において食育の充実を図るための課題と方策について検討（第1回食育実践委員会）
9月 研究テーマの決定
9月 研究の在り方についての情報交換（第2回食育実践委員会）
9月～ 各学校において研究テーマに基づき実践研究
11月 各委員による研究についての中間報告（第3回食育実践委員会）
1月 各委員による研究成果の報告（第4回食育実践委員会）

②食育実践委員の各研究テーマ

- ・小中学校9年間を見通した指導計画の作成とその活用
～野菜をたくさん食べようの取組を通して～
- ・系統性を重視した食育指導の取組
- ・児童生徒の朝食の内容充実のための効果的な指導
- ・教職員や家庭と連携した効果的な指導の在り方
- ・自分で食事作りを実践できる子どもの育成
- ・家庭と連携した効果的な朝食指導の取組
- ・食育の活性化に向けての取組～実践を通して～
- ・教職員と連携した給食の時間における食に関する指導の在り方

③食育実践委員が行った効果的な指導のための主な方策

- ・校内（校外）食育推進委員会の活用
- ・重点課題について、9年間を見通した指導計画の作成
- ・発達の段階や系統性を考慮した指導計画の作成
- ・年間指導計画等に基づく教職員の共通理解
- ・重点課題に基づく「関連図」の作成
- ・各教科等の指導内容を相互に関連付けた指導の実施
- ・給食を教材として活用した指導の実施
- ・担任が活用するための指導案等、指導資料の提示
- ・栄養教諭の専門性を生かしたTTによる指導
- ・学習を家庭での実践につなげるための家庭学習の活用
- ・保護者との連携を図ることを重視したワークシートの活用 等

4 指導の充実を図るためのリーフレットの作成・配布

- 食育実践委員の研究をもとに、食育についての啓発を図るためのリーフレット「食で育む生きる力～学校全体で食育を進めるために～」の作成
- 県内の公立小・中学校全教職員へ配布

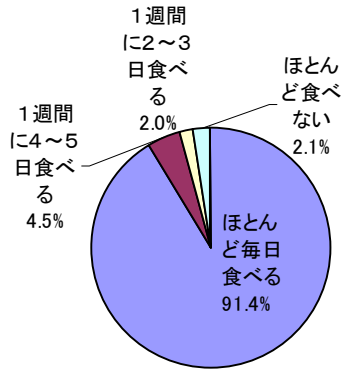
テーマに関する具体的計画

1 平成22年度児童生徒の食生活等実態調査結果の概要

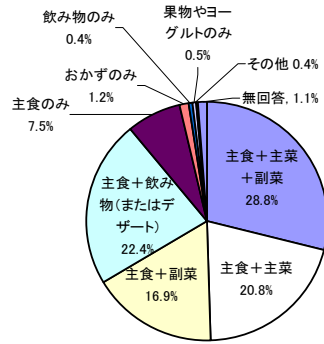
①朝ごはんについて

朝ごはんを毎日食べていない子どもが8.6%いる。
 約1/3の子どもは、主食とおかずが揃っている食事を食べていない。
 約1/5の子どもが一人で朝食を食べている。

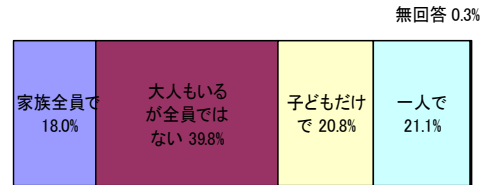
<摂取状況>



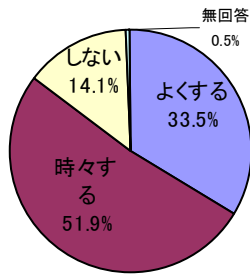
<料理の組み合わせ>



<誰と>

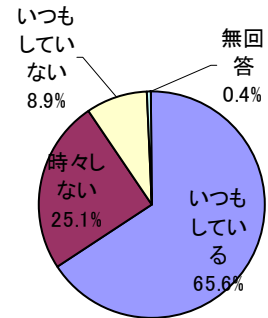


②食事作りや片付けの手伝い



食事作りや片付けの手伝いをしている子どもが約85%いる。
 食事のあいさつを「いつもしていない」子どもは約9%、内訳は小学校が5.5%、中学校が14.2%である。

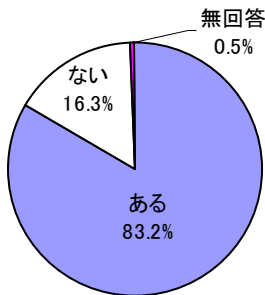
③食事のあいさつ



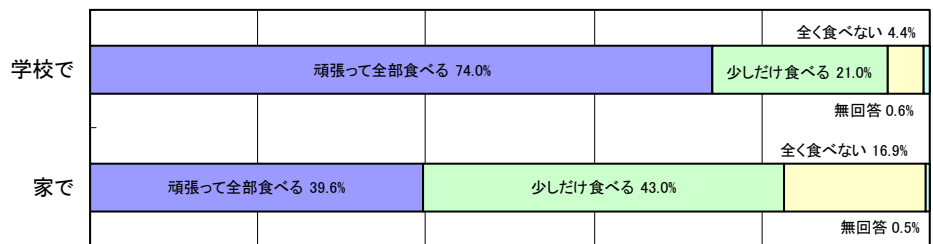
④嫌いな食べ物

嫌いな食べ物について、「学校で」の方が「家で」に比べて頑張って食べている状況が見られる。

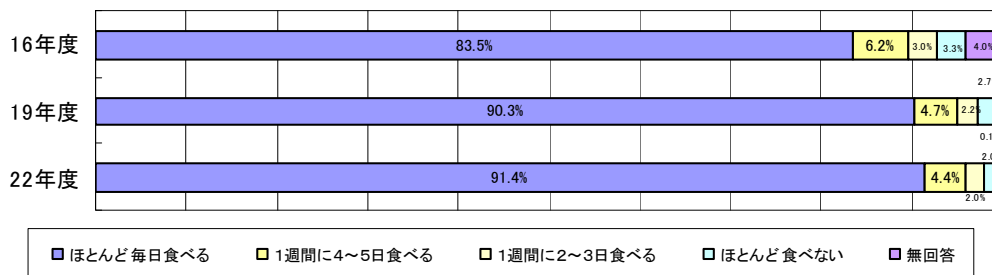
<嫌いな食べ物の有無>



<嫌いな食べ物への対応>



⑤経年比較 (朝ごはんの摂取状況)



朝ごはんを「ほとんど毎日食べる」子どもの割合が増加し、「ほとんど食べない」子どもの割合が減少している。

数字で変化のあった事項について

各食育実践委員の担当する学校において、学校や学級の重点課題に基づいて研究テーマを定め、効果的と考えられる方策により実践を行った。その結果、以下のような成果が得られた。(ただし、本研究については、学校全体が対象ではなく、特定の学年や学級での取組である。)

○小学校における実践から

一月の給食の平均残量	7%→4%
毎日、「朝も晩も野菜を食べる」児童	32%→35%
食事作りが楽しいと感じる児童	67%→78%
料理が上手になったと思う児童	20%→39%

○中学校における実践から

給食の時間に配布資料を活用して指導している教職員	25%→50%
朝食で主食とおかずを食べている生徒	30%→37%
朝食を毎日食べる生徒	81%→89%
朝食で「主食・主菜・副菜」を組み合わせる生徒	34%→40%

事業全体を通じて、特に効果のあった方策等について

- 児童生徒の実態に応じた重点課題を設定し、作成した指導計画に基づき教育活動全体で関連付けた指導を実施したこと。
- 学級活動や給食時間の指導にかかる学習指導案や関係資料を職員間で共有し、学校全体で一貫した指導を行ったこと。
- 栄養教諭が中核としての役割を發揮し、効果的な指導のために必要な「重点課題の設定及び指導計画の作成」や「指導のための資料の提示」等に積極的に取り組んだこと。

今後の課題(今回の事業により新たに見えた課題など)

- 今回の研究で効果的とされた方策について、学校全体の取組としての実践を深めること。
- 効果的な方策について、県内の全公立小・中学校への普及啓発を図ること。
- 実践協力校における本研究を生かした実践や、啓発を図るための研修会の開催等の新たな取組が必要であること。

